

# ふるさと Something NEWS

第37回

## 災害にあったては「共に生きる」

### 行政サービスというPM

一般社団法人 光楓座  
一般社団法人 e f c o . j p  
代表理事 佐藤建吉

#### ▼災害と生きる

21世紀が、9・11というニューヨークのワールド・トレード・センターへの航空機突入(2001年9月11日)という想定外の人為事件で幕開きした。それから10年後には、3・11(2011年3月11日)という福島第一原発が地震&津波&メルトダウンという3重災禍が、科学技術を過信しそれを妄信する人間社会に迫った。

#### ▼システムと要素

コロナ禍中で、スーパーコンピュータの「富岳」が、世界一の計算速度を達成し、政府は国威の発揚の目玉として、その競争の結果が、来年やその後の未来を約束するものではな

い。利那の記録は、文化ではあるがあまり意味はな、歴史こそが文明をつくる。製品や商品の優秀さは、個々の部品や要素の集合体として真価となる。なぜなら、単体で用

なすモノは、もはや消しゴムしかなく、その用途対象となる文字を書く鉛筆さえも芯と軸からなる。それ以外の製品や商品は、多数の要素部品からなる。自転車は百の、オートバイは千の、自動車は万の、船舶は十

万の、飛行機は百万の、原発は千万のオーダーの要素部品の構成で組立てられており、その設計、そしてメンテナンスとサービスに努めなければならぬ。製品ばかりでなく人間社会もますます巨大化し複雑化が進んでいる。設計、メンテナンス、

そしてサービスでも、システム化が要求される。システムにおいても大事なのは、「要素」や「システム要素」である。しかし、巨大システムではシステム全体を、いくつかの下部システムに分け、さらに多数の下層システムに分け、それぞれで検討や任務が行われる。それに発せられる命令で、要素や要素システムが処理される。繰り返しの高速演算処理能力は、重要となる。現実の問題では、これまでのコンピュータ社会が過去から引きずっている演算処理スキームや手続きゆえの複雑さが背景にある。改革しようとしても、従来の人間社会のその背景に由来して解決が進めにくい。それは、コンピュータや計算速度が解決するものではない。

「愛をそいでくれた人に、愛ごこたえたい。」  
「本を読まない人はサルーである。」  
「おとなも、ほめよう。」  
「人は、一生青つ。」  
「たいへんよくできなくてもいいです。」  
「地球が2つ必要です。」  
「地球の声、あなたは

「まげなす」  
「おはなしは、おっぱ

#### ▼人間社会ゆえの課題

人間社会でも同様で、法人組織や社会システムが構成される。そこにも要素たる人材と部課があり、経営組織がある。人間社会では、科学技術が技術連関として関わり、それ以外に先述した自然的要因もシステムとして対応しなければならぬ。こうしてより複雑となつてゆく。

複雑な対象では、前述のように、サブシステムに分け処理されるが、その結果、そのプロジェクトリーダーは、全体を把握することが困難になる。責任の一部はサブ

あり、後半10年は、その後であった。後半10年のうち6年は、全村避難であり、最近の4年が帰村後である。飯館村は、福島第一原発から40キロ離れてはいたが、風向きにより高濃度放射能被曝を受けた象徴となった。現在に至る10年間は、突然の被爆災害に起因し、首長としての対応と判断に毎日が迫られた。それは、放射能という未経験で目に見えない事象への対応と判断であった。当初の避難は逃避ではないし、帰村後においても放射能との共存する行政判断である。講演では、とくに10年間の特別な体験で身に着けた(着手帳)の導入による父親参加の育

「まげなす」  
「おはなしは、おっぱ

「まげなす」  
「おはなしは、おっぱ

「まげなす」  
「おはなしは、おっぱ

#### ▼飯館村の行政サービスプロジェクト・マネジメント(PM)

7月11日、福島県飯館村の菅野典雄村長の講演に参加した。菅野村長は、これまで24年間を首長として経験した。その前半14年は3・11の前で

「まげなす」  
「おはなしは、おっぱ

「まげなす」  
「おはなしは、おっぱ

「まげなす」  
「おはなしは、おっぱ

「まげなす」  
「おはなしは、おっぱ

### 連載

菅野村長の口から



金澤翔子の書作(銀座金澤翔子美術館蔵)

「3つのプロセス」の奥行ある引き出しとして体系づけられているマネジメントであり、国際資格でもある。

#### ▼「共に生きる」

筆者は、2014年3月8日に、3・11で被災した「三陸鉄道を応援する鉄道の道サミット」を東京・銀座金澤翔子美術館で開催した。同美術館

「共に生きる」

「共に生きる」

「共に生きる」

「共に生きる」

「共に生きる」

「共に生きる」

「共に生きる」

「共に生きる」

「共に生きる」

「共に生きる」

「共に生きる」

「共に生きる」

「共に生きる」

「共に生きる」

「共に生きる」

「共に生きる」

「共に生きる」

「共に生きる」

「共に生きる」

「共に生きる」

「共に生きる」

「共に生きる」

「共に生きる」

「共に生きる」

「共に生きる」

「共に生きる」

「共に生きる」

「共に生きる」

「共に生きる」

「共に生きる」

「共に生きる」